

柳田國男
橋浦泰雄 共著

産育習俗語彙

国書刊行会

「分類民俗語彙」の復刊にあたって

本年は、日本民俗学の祖・柳田國男の生誕一〇〇年にあたり、内外の学者を集めた国際シンポジウムが開かれた。これを期に、民俗学はさらに広い視野と質を伴った発展期を迎えようとしている。

昭和十年は、民俗学にとって記念すべき年であった。柳田國男の還暦祝を境として全国に民俗学の研究が澎湃としておこり、雑誌「民間伝承」が発刊され、地方では各地に民俗研究の同志が集まり、調査研究の報告をのせた、謄写版などの小冊子が刊行されるなど、幅広い研究活動が展開された。

今回復刻する「分類民俗語彙」一二冊は、いずれも昭和十年から約一〇年の間に刊行されたものであり、多くの研究者たちに利用されとともに、それはまさに、民俗採集に伴う研究の進展を示すものでもあった。

この「分類民俗語彙」は、柳田國男が民俗資料を採集する上で取った方法で、ことばが、過去の日本人の生活の痕をとどめていることに着眼し、ことばを蒐集することにより、日本人の過去の生活、文化、風習等を探り、それを基に、民俗を分類整理しようとしたものである。

発刊当時、柳田國男は、日々の生活に過去の習俗を窺い見ることが不可能になってゆくことを憂慮した。今日それらの危惧は、まさに現実となって表われている。この一二冊の書は、失われた習俗を現在に伝える貴重な資料にとどまらず、柳田民俗学の精髓に迫る基本的な名著でもある。

この「分類民俗語彙」一二冊を再び世に問えることは、心からの喜びであり、同時にこれらの書が、今後の研究における糧となって活用されることを確信し、また新しい民俗語彙集への礎となれば幸いである。

序

小兒が初めてこの人生に御目見えしてから、いよく一人前として世の中へ出るまでの間、一家一門一郷の人々から、どんな待遇を受けるのが普通であるか。むつかしい言葉でいふならば、小兒の社會上の地位や如何。是を我々は大切な問題にして居ります。國により又時代によつて、この通例といふものにも、幾つとも知れぬ相異があつたやうであります。書物を読んだだけでは、精確なる知識の得られないのは當然でありまして、それを補ふ手段としては、現實に今も各地に行はれて居る風習を究め、その比較によつて先づ近世の移り變りを、明かにする必要があるのがあります。この方法を試みる爲に、最も簡便なる目標は用語であります。我々はそれを成るだけ數多く集めて見て、全國の離れた隅々に一致し又は類似して居るものが、中央の或る區域にぽつんと一つ現れたものよりは、古い形態であらうといふことを、考へて見ようとして居るのであります。是が追々に積み重ねられますと、後には可なり重要な事實が、發見せられることゝ思つて居りますが、それには何分にもまだ資料が足りませぬ。どうかこの小さな一巻を御讀みにな

つて、多少の興味を御感じになる方々が、さういふ話ならば此方にもあると、たつた一つの事でも御報導下されることを念じて居ります。此の類の知識の何倍かに増加した上で、もう一度此の本は書き直すのであります。我々ども、始終なほ心掛けて行かうと思つて居ります。

愛育會の目的として居られるのは、斯ういふ新たな知識を遺憾無く利用して、國の兒童の幸福を、出来る限り豊かにしようといふ點に在るかと思ひます。我々どもは又單に此等の事實に據つて、人が人生といふものをどういふ風に觀じて居たかを、明かに知るのを詮として居りまして動機は必ずしも一つとは言はれませぬが、この毎日の平凡なる社會現象の中に、人を教へ又考へさせる貴といふ知識の埋もれて居ることを、認める點は双方同じであります。是を一部の研究者だけの獨占とせず、弘く人類社會の繁榮を念ずる人々の、共通の問題にしようといふ態度も、異なる所は無いかと思ひます。即ち私たちの側から申しますれば、兼々心がけて爲し遂げたいと思つて居た仕事、幸ひにして愛育會の御役に立たうとして居るのであります。今度の材料は最近の十數年間に、書物や雜誌に公表せられた我々の友人、又は未知の地方同志者の採集記録から、要點を拾つて拔書きして置いたものであります。努めて其の功績を沒せぬ様に、又必要があれば原文に就いて、詳しく知ることが出来る様に、一々出處を掲げて置きました。その材料を分類し

整理し、大よそ読み物の形に書き直したのは、橋浦泰雄氏の勞力であります。十分注意しても尙免がれなかつた意味の取りちがへ、又は一部の脱落などは、それ／＼の土地の方々に、もう一度よく見て訂正をしていたゞきたいと思ひます。是と名が同じで内容の異なる場合、或は事柄はよく似て居て、名稱の丸でちがふといふ様な例を、他の郷土の讀者からも、數多く寄せられんことを切望して居ります。

昭和十年九月

東京市外砦村

柳 田 國 男

産育習俗語彙目次

序	一
(参考書名略符表)	一
一、總稱	一
二、生兒目名	八
三、妊娠祝	二七
四、産屋入・産の忌	三二
五、産婆	二六
六、分娩の前後	三三
七、産神と箒神	三四
八、産飯	二六
九、乳付親	四四
目次	一

一〇、嬰兒の成育……………
哭

一一、三日衣裝……………
哭

一二、髪垂……………
吾

一三、産屋祝……………
吾

一四、名付祝……………
充

一五、孫祝……………
充

一六、火合……………
充

一七、其他の種々なる儀式……………
充

一八、火の忌明……………
充

一九、初節供……………
充

二〇、モモカ……………
充

二一、イヅミ・コピタナ……………
充

二二、餅踏……………
一〇一

二三、髪置……………
一〇五

二四、氏子入	一〇八
二五、タフサギ祝	一三三
二六、所屬未定	一二五

目次

參考書名略符表（但し主要なるもののみを舉ぐ）

一、民 民族

一二、風 風俗畫報

二、民學 民俗學

一三、中 中國民俗研究

三、民歷 民俗と歴史

一四、奥 奥南新報

四、民事 日本民事慣例類集

一五、岡 岡山文化資料

五、藝 民俗藝術

一六、日 日本地理風俗大系

六、郷 郷土研究

一七、幸 幸手方言集

七、旅 旅と傳説

一八、北 北安曇郡郷土誌稿

八、産 旅と傳説、六ノ七、「誕生

一九、周 周桑郡郷土彙報

と葬禮」特輯號

二〇、積 積志村民俗誌

九、人 人類學雜誌

二一、壹 壹岐島方言集

一〇、方 方言

二二、五島 五島民俗圖誌

一一、諸 諸原

二三、三河 三河吉田領答書

一、總 稱

誕生には當然それに前行する妊娠と、これに伴ふ生理的な各種の現象とが生じる。出産はまづ其處から初まるのである。

ミワケ 石見の矢上村では、出産のことをかう云つて居る。これはミモチ・ミゴモリした妊婦が、やがて「身分」することである。

シラ 又沖縄の八重山地方では、お産をする事を俗にシラスルと云ひ、シラフジャウなども云つて居る。又出産に用ゐる薪のことをシラタムヌと云ひ、四日の産明きのことをユーカシラアキ、九日の産明きをバクニチジラアキ、産室出初の式を十日ジラなども云つて居る。(産、三二〇頁)

シラの語意は、月經をアカフジャウ、葬ひをクロフジャウと云つて居るのに徴して凡そ推知出来る。フジャウは不淨であらう、

イリガフク 美濃の笠松では出産をかく云つて居る。フクとは出る、涌く等の意味と略ぼ同様

で、水がふく、火をふく、ふきでもの等のフクと同意語であらう。

ヒキアゲ 周防の大島では、産婆のことをヒキアゲンバと云ふが、出産のことはヒキアゲと云つて居る。

ウブキ 岡山地方では産を催すことをかく言つて居る。ウブキガツクなど。(岡、一ノ五)「産氣」の意であらう。

ウメキ 豊岐國でも産氣のことをかく云ふ。轉じては、物事のきざしをもかく云ふ。前項同様「産氣」の訛語であらう。(壹)

チチゴハツレ 近江高島郡地方では、子供の生れるのはチチゴの上刻で、人の死ぬのはその下刻であると云ふ。産婆は之を知つてゐて、まだ少し間があるなど、煙草を吸ひなどする。此のチチゴハツレの兒は育たぬと云ふ。(産、二六七頁)チチゴと云ふのは「致死期」と書くその轉訛であらうか。

アドオクレ 陸中の鹿角郡では、産婦が産褥を見舞に行くと、産が長びくと云つて之を忌む。アドオクレとは後産困難の意か。

オドノハジメ 下總香取郡久賀村では、妊娠の兆をかやうに云つて居る。(民、三ノ七七六頁)
オトメナシ 磐城の石城郡草野村、同郡高木村等では、又産婦の事をかく云ひ、(産、二三八頁
。民學、一ノ一五〇頁) 下野地方では出産のことをオトナシと云ひ、妊娠したことはオトシタ、
子守のことはオトモリなども云つて居る。又越中地方では、次の子を孕む事をオトメルとも云
つて居る。

此のオトと云ふのは、乙姫、乙女、弟等のオトと同意語で、幼きもの、年下のもの等の意を含
んで居る言葉であらう。又オトメナシのナシは、成す、作すの意であらう。此の言葉の使用地域
はかなり廣大であつたやうである。

ヒノベ 信州諏訪地方では、『オヒノベになつたでお頼み申します』と里の母親から嫁入先の
母へ傳へると、それで初めて懐胎した事を知ると云ふ。「日延」と云ふのは「火延」の意で、月
經の閉止を意味する。(産、二四四頁) 火は忌の火であつて、即ち忌の來るのが遅い意である。尾
張の知多郡でも、ヒガノビル又はヒガトマルと云つて居るが同様の意である。

タナブ 奥州八戸地方では、孕むことをかく云ふ。お荅前様(馬の神様)にあげたものを、女
が食ふと十二月タナブと云ふ。又タナブ時でないのにタナツタ子を、ギヤクゴと云ふ。(奥、七ノ

一〇ノ二八）因幡でも同様に妊娠のことをタナルと云ふ。此の語意は充分に明かではないが、タナツモノ・タナビクなどのタナと共通の意を持つものではあるまいか。尙豊富な資料が必要だ。

カカエル 宮城縣栗原郡藤里村では、懷妊のことをこのやうに云ふ。カケエアルと發音する者もある。又モツとも云ふ。（藤里村誌）モツはミモチの略か、カカエルもモツも殆ど大差のない内容の言葉である。大きな腹を抱へると云ふ言葉は、何處でも臨月に近いミモチの女の形容詞として通用して居る。

マミシグナイ 青森地方では妊娠した場合をかう云つて居る。だからマミシグナルと云ふのは、産後達者になつた事の謂である。マミと云ふのはマメと同じ語で、マメであるないが、健康の裏表である事は全國的に使用されてゐて、何人も承知して居る所であらう。

サント 廣島市附近では、産婦の事をかく稱して居る（産、二八四頁）「産人」の謂であらう。
ハラビト 青森八戸市では産婦をかく云ひ、又ハラビトヲナゴなども云つて居る。「孕人」の意であらう。

ハラウチ 豊岐では産婦をかう云つて居るが。（豊）此のウチと云ふのは、「内」の意か否かまだ明かでない。

オビヤド 志摩の各村では妊婦をかやうに云つて居る。(島、二ノ一二〇頁) 靜岡縣ではこれをオビウトと云つて居る村があるが、いづれも「産屋人」の轉訛であらう。

ニユウ 伊豫の温泉郡では妊婦をニユウと云つて居る。語意は未だ明確ではないが、前代の習俗には、孕女の爲めに壬生部と云ふが設けられてゐた事が古書に見え、その地名となつたらしい壬生、丹生など、云ふ村が現在各地に見え、又ニフィリと云ふ言葉などもあるから、或はそれ等と關係のある言葉かも知れない。

ニツダ 伊豆の初島では妊婦をかく云つて居るが、これもニユウの轉訛かも知れぬ。尙此の島では、ニツダのある時は不漁であると云つて居るが、又人によつては、大漁する事もあると云ふ。山狩の方で、黒不淨、赤不淨は不獵であるが、白不淨の場合は好獵であると云ふ例が、後狩詞記に見えて居る。

ハンジヨニン 薩摩山川町の福元では妊婦をかく云ふ。「繁昌人」の意で、兒を産み殖すのでかう云ふのであらう。

ゴロゴロサマ 同じく産婦の事を會津大沼郡ではかく云ふ。隠語かと思ふが意味は不明。

ウブメ 長門豊浦郡乗貞や、蓋井島では、身持の女が死んだ場合には、そのまゝ埋めるもので

はない、分身せしめてから後に葬らぬとウブメになつて出ると云つて居る。普通ウブメと云ふのは「産女」のことであるが、此處のウブメは一種の怪物の意に解せられて居る。

シヨノ 乳兒のある中に、次子を懷妊するのを、土佐ではシヨノと云ふ。『隣の子供は此頃えらい機嫌が悪るいが、又シヨノぢやないかよ』など云ふ。

アヒハラ 富山縣射水郡柳田村では、次の懷妊による乳ばなれの爲め、固形物を攝り過ぎて消化不良になつたのをかく云ふ。これをオトミマケと云ふ地方もある

アヒバラミ 東播磨地方では、一家のうちに二人以上の身持の女がある時には、何れか勝負を生ずると云つて忌む。(美濃郡誌、一一一七頁)

○

ツハリ 惡阻とも擇食とも書いて、全國的に通用して居る言葉であるが、三河の北設樂などでは、木の葉の紅葉する事を指しても又かく云ふ。(風、一三七頁)又果實などの熟する意味にも使用して居る所もある。妊娠から來る此のツハリも同意のものであらう。

クセ ツハリをクセと稱して居る地方は専ら東北一體にわたつて居る。腹痛を意味して居るクサと云ふ言葉などと關係のある言葉かも知れない。陸前石巻では單にクセとのみ云つて居るが、

陸中の上閉伊ではクセヤミと云ひ、夫が同時に病んで助ける場合があつて、『病んで助けることが出来るのはクセヤミばかり』と云ふ諺もある。(民、三ノ五三七頁)

同國紫波郡ではクセヤマヒと云つて居る。此處でも同様に病んで代るにいはのはクセヤマヒばかりだと云つて居る。(民學、一ノ五ノ三五一頁)

羽後の南秋田地方ではこれをコグセと云ひ、その隣の河邊郡ではコンクセと云つて、『子辭』などゝ書いて居る。又秋田でもモチグセと云ひ、臨月のことをモチヅキなどゝ云つて居るが、此のモチは望月のモチと同一の語意であらう。ミモチ・モツタナ(子負帶)など、モツと云ふ語は、前代に於ては、現今よりも廣意に使用されてゐたやうである。

下總海上郡でも同様にモチグセと云つて居る。

武藏北葛飾郡の幸手町でもアリクセと云つて居る。(幸)

三河設楽ではコヤグセと云つてやはりツハリのことである。コヤと云ふのはヒマヤ・タヤ・ベツヤなどゝ云はれて居る婦女の月經時の住居の事である。

ミヤミ 對馬ではツハリの事をかう云つて居るが、肥前の彼杵地方では、ミコヤミとも居つて居る。(彼杵方言集)意味は明かでないが、コと云ふのは尻の事を云つて居る例もあるが、「中に

ある物」と云ふ意を含んで居る言葉なのかも知れない。

二、生 兒 名 目

ウマレコ 「生れ子」の謂であるが、下總香取郡久賀村では、毎年正月七日に村の生れ子は他村に嫁婚に行つて居るものも、その外他行して居るものも、一切村に歸つて鎮守のオビシヤに参詣する。(郷、四ノ六六八頁) 此のウマレコと云ふ言葉は、ウブスナと云ふ言葉に對する言葉であらう。

マ コ 大阪府下の南河内方面では、すなほな子と云ふ意味にマコと云ふ言葉を使用する。マコノ略かとの説があるが如何か。

ウダレゴ 周防の柳井では、乳呑子のことをかく云ふ。語意は明かでない

サヤゴ 隱岐島では赤子のことをかく云ふ。(隱岐國訛言調査表) 此のサヤと云ふのは「啼く」と云ふ意の言葉であらう。

ジユズカケゴ 臍の緒を肩から斜にかけて生れる子は育たず、之を珠數かけ兒と云ふと武藏越